

平成三十一年度入学試験問題（推薦入試Ⅱ）

小 論 文

教育学部 学校教育教員養成課程

小学校教育コース 国語教育専修

注 意 事 項

- 一、受験番号を解答用紙の所定の欄に記入すること。
- 二、解答は必ず解答用紙に記入すること。
- 三、解答用紙の他に、下書用紙を配付するので、取り違えないよう注意すること。
- 四、解答時間は、一二〇分である。
- 五、縦書き、鉛筆（シャープペンシルを含む）書きにすること。
- 六、解答する際の字体は楷書とし、ていねいに書くこと。

非公開

問題

次の文章を読んで、後の各問に答えなさい。

非公開

(井上史雄、『新・敬語論 なぜ「乱れる」のか』、NHK出版新書、二〇一七年、二二五～二二八ページ、抜粋・一部改変)

問一 空欄 A } C に入る適切な語をア～カの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア 涵養    イ 簡要    ウ 寛容    エ 慣用    オ 官用    カ 肝要

問二 傍線部① 「ことばの乱れとして騒がれるラ抜きことばが、実はことばの経済性と体系性を高める言語変化である」とあります。このことについて、「見られる」とそのラ抜きことば「見れる」を例に用いて具体的に二〇〇字程度で説明しなさい。

問三 敬語の体系は、言語によって異なりをみせます。例えば、沖縄県においても元々の琉球方言で丁寧体と普通体の区別のない地域があります。あなたがこのような地域の小学校に赴任したことを想定します。傍線部②「そもそも敬語には大らかに接するのが得策だ」という主旨を踏まえて、教室でどのような敬語指導をしていきたいですか。教室での具体的な場面を想定しながら六〇〇字程度で述べなさい。

平成三十年度入学試験問題（推薦入試Ⅱ）

小論文

教育学部 学校教育教員養成課程

小学校教育コース 国語教育専修

出題の意図

本専修では、国語科の世界の豊かさを生かして、多様な素材文を提供し、受験生が付け焼き刃でない「国語科へのこだわり」「国語への思い」を持つているかどうかを、小論文試験において測りたいと考えている。

これまで出題してきた試験問題を振り返ると、平成二十六年度は短歌における「オノマトペ」の効果について、平成二十七年度は、「学力」に関する一般的な教育論を素材文とし、「国語教育」に適用させた出題をした。平成二十八年度には、「ものの言い方」の地域差を通じて、地域文化の保存・継承と教育・しつけの問題について深く考えさせる素材文を用意した。また昨年度は、あいまいで微妙な表現を楽しむ社会と、はつきりともを言う社会との比較を通じて、バックグラウンドの異なる人々が共生する社会について深く考えさせる素材文を用意した。

本年度は、敬語についての素材文を用意した。敬語体系は、言語によって異なりをみせる。例えば、琉球大学の所在地である沖縄県の言語においても、首里方言のように敬語表現が発達している地域もあれば、宮古方言のように丁寧体と普通体の区別がない地域もある。素材文においては、人による敬語の受け取り方の違いについて言及した上で、敬語には大らかに接することが得策だということが述べられている。

小学校においては、言語的背景の違いもあり、敬語があまりうまく用いられない児童のいる地域もある。問三では、このような教室の状況を踏まえさせることにより、ことばと生活の結びつきの大切さを意識したことばの指導について考えさせる。また問二では、ことばの乱れとして取り上げられるラ抜きことばを通じて、ことばの体系性と経済性について考えさせたい。具体的には、五段活用動詞の「書